

ツールレイク強制収容所の日系アメリカ人

本 多 善

要旨

日本からアメリカへ移住した日系アメリカ移民はどのような困難を乗り越えてきたのか。本研究は従来の日系アメリカ移民研究において未だ十分に研究されていないツールレイク強制収容所に注目することで、彼／彼女らが経験した移住先での困難や葛藤を明らかにする。本研究では、まず、先行研究から現在までの日系アメリカ移民の歩みを紹介する。次に、日米開戦下における彼／彼女らの苦難を明らかにするために、強制収容所に収容される前の仮収容所について述べる。ここでは、住居を奪われ、強制的に立ち退きを命じられた日系アメリカ移民の歴史について言及する。次に、全米十か所に設置された日系アメリカ人の強制収容所について述べ、その中でも特異な施設として機能してきたツールレイク強制収容所に注目する。最後に、ツールレイク強制収容所の資料からその施設、機能、構造について分析する。ツールレイク強制収容所の日系アメリカ移民の史実を通して、彼／彼女らが移住先での困難や葛藤を経験しながら、日米の狭間で生き抜いてきたことを明らかにする。

キーワード

ツールレイク強制収容所、日系人、日系移民史

はじめに

1. 日系人の歩み
2. 日系人の排除
3. アッセンブリー・センターと強制収容所への送還
4. ツールレイク強制収容所
5. ツールレイク強制収容所内の構造・機能・管理

おわりに

はじめに

本研究は日系アメリカ移民（以下日系人）、特に第二次世界大戦中に設置された日

系人の強制収容所を対象とする¹。筆者は日系移民史研究のため、2009年から日系二世への実地調査を行ってきたが、現在、アメリカに住む日系二世の高齢化が進んでおり、戦時期についてのインタビューの証言や資料の収集が困難になりつつある。

日系二世はアメリカの歴史において重要な役割を担ってきた。第二次世界大戦と戦後のアメリカ社会を生き、日系二世は激動の道を歩んできた。日系二世の両親である日系一世は、アメリカに移住した当初、アメリカの市民権を獲得することができなかった。一方、日系二世の多くは、アメリカで生まれ、既にアメリカの市民権を獲得していた。親は日本人で子はアメリカ人という状況から、世代間の葛藤が生じていた。更には、戦時中、日系人に対して施行された強制収容、そして、戦後の公民権運動や差別是正運動を通じて、日系二世はアメリカ社会で奮闘した。

1941年の日米開戦以来、日系人は強制収容所に収容され、終戦まで解放されることはなかった。こうした経験はアメリカの負の遺産となって後世に語り継がれている。しかし、日系人の歩みの中でまだ十分に明らかにされていない収容施設がある。それがツールレイク強制収容所である。

ツールレイク強制収容所は第二次世界大戦中、日系人を収容した施設の一つである。1942年、日系人を収容するため、全米十か所に強制収容所が設置された。その中でもツールレイク強制収容所は別名、ツールレイク隔離収容所と呼ばれた。この収容所には、1943年に日系人に対して実施された忠誠心調査においてアメリカに忠誠を示さなかった日系人が集められたからである。全米に設置された各収容所から、「問題児」を隔離するための施設として機能していく。

筆者は2009年1月並びに2013年3月、カリフォルニア州サンフランシスコ・サクラメント・サンノゼを中心にツールレイク強制収容所の被収容者にインタビュー調査と実地調査を行い、加えてツールレイク強制収容所の資料を収集した。本研究は調査中

1 本研究では日系人に関する言葉を以下のとおり、定義する。

「日系アメリカ移民」とは日本からアメリカに移住した人々、またその子孫である。「日系二世」とは日本からアメリカに移住した一世の子供(移民第二世代)である。「日系アメリカ人」とは、日本からアメリカに移住した人々(或いはその子孫)で、アメリカの市民権を獲得した人々である。本稿では、日本にルーツを持つ日系アメリカ移民を日系人とし、また特定される世代については日系一世、日系二世とする。

に得られた資料を基に、日系移民史研究において十分に焦点が当てられてこなかったツールレイク強制収容所について述べる。

以下は本稿の構成である。1章では、日系人の歩みを先行研究から明らかにする。2章では、強制収容所に収容される前の仮収容所（以下アッセンブリー・センター）について述べる。3章では、全米十か所の強制収容所について述べ、4章では、ツールレイク強制収容所を俯瞰する。5章では、ツールレイク強制収容所の資料からツールレイク強制収容所の施設、構造について考察する。本研究を通して、ツールレイク強制収容所の日系人が葛藤しながら日米の狭間で生き抜いてきたことが明らかになるだろう。

1. 日系人の歩み

現在までの日系人に関する研究において坂口満宏やハルミ・ベフはアメリカの日系人に関する多くの資料を扱いながら、日系人の歩みと現在の状況について社会学的アプローチを試みている²。これらの研究の多くは、外務省資料として残っている二次資料を中心に調査し、それぞれのフィールドと外務省資料との比較によって論じられている³。以下がこれらの研究における日系移民史の年表である。

アメリカ日系移民史の年表（概略）

1894	明治政府、移民保護法を制定し、移民取扱業務を民間に委託
1907	アメリカ西海岸で排日運動が強まる
1909	ハワイ・オアフ島で、不当労働に対する日系人の大ストライキ
1913	<u>加州、外国人土地所有禁止法を制定（日系人の無所有権）</u>
1920	ハワイ・オアフ島で再び大ストライキ 加州、「帰化不能外国人」の借地権を禁止する土地法を制定
1922	<u>合衆国最高裁、日本人を「帰化不能外国人」と規定</u> ケーブル法制定、これにより「帰化不能外国人」と結婚した妻も市民権喪失
1929	日系二世の組織、全米日系市民協会（JACL）組織される

2 ベフ、ハルミ（2001）『日系アメリカ人の歩みと現在』人文書院

坂口満宏（2001）『日本人アメリカ移民史』不二出版

3 外務省領事移住部『わが国民の海外発展—移住百年の歩み』（カリフォルニア大学バークレー校図書館より現在相愛大学図書館収蔵資料）

1941	<u>ハワイ真珠湾攻撃、開戦と同時に日系の代表者を FBI が連行 (逮捕者多数)</u>
1942	<u>2月、ルーズベルト大統領、日系を強制収容する命令を発令、日系人は強制的に 駆り集められ、カリフォルニア州、アイダホ、ワイオミング、ユタ、コロラド、 アリゾナ、アーカンソーの計10ヶ所に110000人以上を収容</u>
1943	<u>ハワイ二世による第100大隊編成、442部隊も編成。ヨーロッパで活躍</u>
1945	日本敗戦、日系人強制収容所から帰還
1982	デトロイトでヴィンセント・チンが日本人と間違われ殺害される
1990	<u>強制収容に対する補償運動の勝利</u>
2001	ワシントンで日系アメリカ人記念碑が設立 テロ以後の国内でのアラブ系に対する暴行事件に対し、全米日系市民協会による 抗議の声明を発表

(外務省資料、坂口満宏作成年表、移民史Ⅲ⁴ 筆者抜粋、下線は筆者による)

年表による移民史の概要は以下のようなものである。

1866年に日本では鎖国令が解かれ、これによって貿易商人、留学生などの海外渡航が許可された。1868年にはハワイへの出稼ぎ移民153名がホノルルに到着した⁵。その後、日本政府はハワイ王国と移民協定を結んで、1885年「官約移民」(政府と政府の契約によって行われた移民)を送った。第一回目の官約移民の数は944人であるとされる⁶。この制度によって後に多くの日系一世がハワイへそしてハワイからアメリカ本土へと移動していった。1884年から続いた「官約移民」は1900年に日本政府によって禁止される⁷。アメリカ政府は、多くの移民がハワイやカナダからアメリカに移り住んだことから、1900年に一時的にカナダ・ハワイからの移民を禁止する⁸。また1902年にはアメリカ政府によって制限つきながら渡航禁止が緩和され、再び日本か

4 坂口、前掲書。ペフ、前掲書。外務省領事移住部、前掲書。今野敏彦・藤崎康夫(1986)『移民史Ⅲ』新泉社

5 今野・藤崎、前掲書 p.203

6 同上(第一回目の官約移民の数については、外務省資料では約950名となっている。)

7 外務省領事移住部、前掲書 p.622

8 今野・藤崎、前掲書 p.409

8 同上

らの移民が増加する⁹。

日露戦争が終結した1905年、カリフォルニア州で「黄禍論」が高まり、「日韓人排斥協会」が誕生する。この協会はアメリカの労働組合を中心として構成されていた。中国からの移民と同様に、日本からの移民も現地の労働者階級を中心として社会的抑圧を受けることとなる。翌年には、サンフランシスコで「東洋人学童排斥法案」が通過する¹⁰。日本の子供達を現地の公立学校に入学させない法案である。また1907年には約38000人の日系人がハワイからアメリカへ転航し、当時の米大統領であったセオドア・ルーズベルトはハワイからの日系人のアメリカ本土への渡航禁止令を出す¹¹。またこの年、アメリカ政府は「日米紳士協定」として日本政府による日本からの渡米に対する旅券発行の停止を盛り込む協定を結んだ。これにより一時的に移民は減少する¹²。さらに1913年にはカリフォルニア州で「排日土地所有禁止法」が制定された。これは移民に一切の土地所有が認められなくなる法であった¹³。農業を中心として生活する日系一世にとってこの土地法は死活問題であり、彼／彼女らは急遽、米本土で生まれた市民権を持つ自分たちの子供(二世)や現地の親日的な人々に土地を所有してもらうよう要請した¹⁴。

1920年に入ると反日の感情はますます強くなる。1920年に「写真結婚婦人」の渡米が禁止された。また一般投票によって「第二次カリフォルニア州排日法」も制定され、これによって日系一世には土地の所有どころか、土地を借りることも禁止された¹⁵。1922年には米国大審院で日本人の帰化不能の判決が下された。日系一世は「帰化不能外国人」となったのである¹⁶。翌年には「排日移民法」が施行される。1941年には「日米修好通商条約」が撤廃され、日米の貿易が凍結されるとともに、両国は太平洋戦争へと

9 同上

10 同上 pp.409-410

11 同上 p.410

12 今野・藤崎、前掲書 p.204

13 外務省領事移住部、前掲書 p.625

14 坂口、前掲書

15 外務省領事移住部、前掲書 p.627

16 同上 p.628

突き進んだ¹⁷。アメリカでは1942年、フランクリン・ルーズベルト大統領が行政命令第9066号に署名、ロスアンジェルスの日系人はマンザナ収容所へ移動、後に軍事地域の日系人11万人の立ち退きを完了する¹⁸。1943年にはハワイの日系2世による442部隊が編成され、米軍として前線で活躍し、これによって戦後、アメリカ政府による日系人への対応が見直されることとなった¹⁹。1943年連邦警察官が全成人日系人に面接し「忠誠心調査」を行っている²⁰。後に終戦によって日系人への軍事制限は撤廃され、収容所から日系人は開放された。

アメリカ政府は1949年になって日系人に対する法による「敵国人扱い」を終わらせた²¹。しかしこの年、日本人帰化法案が両院で通過したにも関わらず、トルーマン大統領は署名を拒否した²²。日米で日米安全保障条約が発効された年、ウォルター・マッカランの「日本人帰化法」が制定された。これによって全人種にアメリカへの帰化権が与えられることとなった²³。また1924年から続いた「排日移民法」をこの年に撤廃している²⁴。全米の新聞に「ジャップ」の差別語の適用を禁止する記事を勧告したのもこの年である²⁵。1976年、アメリカ政府は日系人の立ち退きを命じた行政9066号を正式に廃棄した²⁶。戦後31年が経過してからの出来事である。1982年にはデトロイトでロナルド・イーブンズが、日本人と間違えて中国系アメリカ人のヴィンセント・チンを暗殺する²⁷。2001年にはワシントン特別地区において日系アメリカ人記念碑が建てられた²⁸。9.11以降、アラブ系のアメリカ人に対する暴行事件があいつぎ、全米

17 坂口満宏作成「年表・日系アメリカの歩み」、ベフ、前掲書 p.233

18 同上

19 今野、藤崎、前掲書 p.206

20 同上 p.413

21 同上

22 同上 p.414

23 同上

24 同上

25 同上

26 ベフ、前掲書 p.234

27 田中道代(2001)『アメリカの中のアジア』社会評論社 pp.86-96

28 ベフ、前掲書 p.235

日系市民協会は真珠湾攻撃後の人種偏見と政治指導による誤りを繰り返さないように声明を発表した²⁹。

以上が簡単なアメリカにおける日系人の歩みである。次に戦時中の日系人強制収容所に着目するために、日系人の排除がどのように進められたかを明らかにする。

2. 日系人の排除：アッセンブリー・センターを中心に

1941年12月8日、日本によるハワイの真珠湾攻撃によって米国に宣戦布告宣言が出され、その一か月後の1942年1月15日、全米の代表的一世ら約600人がモンタナ州ミズラ抑留所へ収容された。その後、太平洋沿岸の日系人約12万人が全米10カ所の強制収容所に収容された³⁰。全米10カ所の中で特殊な収容所であったのがツールレイク・キャンプである³¹。ツールレイク強制収容所に関する資料は大変少なく、ツールレイクを主眼として書かれた書物はほとんど存在していない。『米国日系人百年史』においては、「日系人の不忠誠組」や「日本主義団」を掲げた日系人が集められた収容所として紹介されているが、詳細はあまり記述されていない。また、『北米百年桜』は一世の半生を主眼としているため、強制収容所に関する情報が大変少なく、ツールレイクは取り上げてすらいない。よって日本語文献におけるツールレイクの研究は全くなされていないのが現状である。

一方、英語文献においてはいくつかの資料が存在している。特に重要な資料としては *Second Kinenhi: Reflections on Tule Lake*³² や *Tule Lake Revisited: A Brief History and Guide to the Tule Lake Concentration Camp Site*³³ が挙げられる。近年

29 同上

30 伊藤一男(1969)『北米百年桜』北米百年桜実行委員会 p.1062

31 Tule Lake はアメリカ本土において多くの日系人が「ツーリーレイク」と発音しているが、『米国日系人百年移民史』では、「ツールレイク」と表記されているため、本稿においてもこの名称を採用している。加藤新一編(1961)『米国日系人百年史』新日米新聞社 p.313

32 Tule Lake Committee. 2000. *Second Kinenhi: Reflections on Tule Lake*. San Francisco: Tule Lake Committee

33 Takei, B. & Tachibana, J. 2012. *Tule Lake Revisited: A Brief History and Guide to the Tule Lake Concentration Camp Site*. San Francisco: Tule Lake Committee

の運動として、ツールレイク強制収容所を後世に伝えようとする活動が盛んであり、この2冊も歴史を風化させないために、Tule Lake Committeeによって書かれたものである。

ツールレイクはオレゴン州とカリフォルニア州の州境にある、インディアン古戦場として歴史的に名高い土地である。昔は湖底であったことから、樹木一本もない荒涼とした所である³⁴。砂嵐の厳しい土地で洗濯や調理などはほとんどバラックの中で行っていたことがわかっている。ツールレイクを知らない現地の日系人も多く、ましてや日本においてツールレイクの資料がない。

ツールレイクは現地の日系人や歴史家らにとって、Loyalty Oath (忠誠心調査) における「不忠誠者」が集められた収容所という認識があった³⁵。先に触れたように、このような理解は国家への忠誠か不忠誠かという歴史的言説によってつくられてきた。

日米の開戦から二か月後の1942年2月19日、ルーズベルト大統領が行政命令9066号を発令し、これにより日系人は強制的に駆り集められた³⁶。9066号の発令は多くの日系人を混乱させた。ほとんどの日系人が土地を奪われ財産を奪われることになった。政府は3月11日に WCCA (Wartime Civil Control Administration) すなわち、戦時民事管理局による民間官吏を組織して強制収容を執行した³⁷。まず、12万人の人々を強制的に連行することが困難であったことから、WCCA による支配のもと、15カ所のアッセンブリー・センター (Assembly Center) にほぼすべての日系人が収容された。

引退き日系人集合所開設期と最高人員

州名	場所	開設	最高収容人口
アリゾナ州	メイヤー	5月7日	245
ワシントン州	ブヤラップ	4月28日	7390
オレゴン州	ポートランド	5月2日	3676
カリフォルニア州	メリスビル	5月8日	2451
	サクラメント	5月6日	4739
	タンフォーラン	4月28日	7816

34 こうしたツールレイクの気候については2014年に行った調査をもとにしている。

35 加藤、前掲書 p.313

36 年表は坂口満宏によって作成された。詳しくはペフ、前掲を参照されたい。

37 加藤、前掲書 p.303

	ストクトン	5月10日	4271
	ターラック	4月30日	3661
	サリナス	4月27日	3586
	マーセ	5月6日	4508
	バインデール	5月7日	4792
	フレスノ	5月6日	5120
	ツラレ	4月20日	4978
	サンタアニタ	3月27日	18719
	ポモナ	5月7日	5434

加藤新一編(1961)『米国日系人百年史』新日米新聞社³⁸

このようにして、政府は日系人の立ち退きをより迅速に確実に実行するために集合所という名目で日系人を管理した。日系人は政府によって登録され、上記の集合所と期日に指定された通りに移動することとなった。立ち退きの集合場所が決定されると、だいたいそれから2日後に手で持てる程度の身の廻りの荷物を持ち、自動車を持つものは自分で運転し、持っていないものは指定の時間に指定の場所へ集合しバスで収容された³⁹。『米国日系人百年史』によると、日系人が収容される際、家財道具等も売却したとしているが⁴⁰、収容所に監禁された人々の話を聞くと、実際はそうではなく、ほとんどの場合、手に持てる分だけの荷物を持ち、土地や家財道具が戻ってくることはなかったという⁴¹。

ここまで強制収容に関する経緯を述べてきたが、9066号の発令に強制収容所への移送という意味合いがあったのかどうかは重要である。9066号は陸軍当局に日本人を立ち退かせる権限を与えるものであった⁴²。これは「必要に応じて米国内に軍事区域を指定し、その地域に居住する者で、合衆国の国防に害があると認められる者は、市民、

38 アッセンブリー・センターに関する資料の統計は加藤によって詳細に分析されている。この図は加藤の『米国日系人百年移民史』をもとに筆者が加筆した。加藤、前掲書 p.303

39 加藤、前掲書 p.304

40 同上

41 このようにほとんどすべての日系人が収容所に監禁されたことによって財産を失った。収容所から解放され、知人に預けた土地が戻ってきた例は大変少ない。

42 同上 p.294

外人の別なく強制的に立ち退かす権限を陸軍省に与える⁴³」というものであった。つまり強制収容所に日系人を連行するためではなく、陸軍省にその立ち退きの有無の権限を委譲するための行政命令であった。しかし、その直後にアッセンブリー・センタが建設され、日系人の収容が実行されたように、9066号は、軍隊による保安地域からの立ち退きという名のもとで、敵国外国人並びにその子孫らを収容する権限を軍に与えた。9066号は日系人の中でも市民権を持たない一世を立ち退かせるものであり、同様にアメリカで出生し市民権を獲得している二世も日系人ということから、この行政命令の該当者となった。

しかし、日系人の歴史において9066号が注目される一方、この行政命令以前に立ち退き令が出されていたことはあまり注目されていない。

1941年12月11日、太平洋岸は戦局地点と宣言され、防衛司令官デウィット中將が任命された⁴⁴。彼は日系人の立ち退きを推進した人物であった。1942年1月29日、米国司法省は次々に日系人に対する法令を発表し、軍事的に重要とみられる港湾、飛行場、発電所の敵国外国人を立ち退かすことを発令したのである。またデウィット中將も大統領の9066号の発令直前、陸軍省に日系人の立ち退き令を勧告している⁴⁵。彼が日系人を排除していったことを端的に表現した言葉が残っている。

ジャップはジャップなのだ。忠誠であろうとなかろうと危険極まりない存在である。忠誠如何を知る道がない。米国市民であるに拘わらず、彼らは理論的に日本人であってそれをを変えることはできない。一片の紙を与えたのみで変わるものではないのである⁴⁶。

デウィット中將の言葉は、日本人と日系人を一括りにし、すべての日本人とその子

43 多くの文献に9066号の翻訳が存在するが、ここでは加藤、前掲書 p.306を引用している。

44 同上 p. 294

45 同上

46 これは下院海軍文化委員会での証言である。詳しくは加藤、前掲書 p.295を参照されたい。

孫たちは市民権の有無に関係なく、同一の敵性外国人であることを指摘している。彼の発言からも理解されるように、強制立ち退きを支えていた論理は、保安地域からの日系人の撤退ではなく、日系人を敵人とする国民国家の論理であった。

こうして、政府は敵性外国人として日系人を管理した。世論においても日系人を敵視する言説の強まりから、9066号は発令された⁴⁷。この発令は、日本人＝敵性外国人という言説を生産したばかりではなく、すべての日系人を国民国家言説における日本人として一括りにすることで、彼／彼女らを監禁し排除したのである。

3. アッセンブリー・センターと強制収容所への送還

アメリカでは日系人が強制収容所について語る際に Camp ではなく Center と呼ぶことが多い。なぜなら日系人の強制収容所は公式には Relocation Center (転住所) と呼ばれているからである。強制収容所を仮収容所や転住所と呼ぶ人々が多くいるが、官公庁の文書やアカデミックな場における Camp の呼称は「強制収容所」或いは「監獄」が相応しい。なぜなら、日系人の歴史を考察すれば彼／彼女らが好んで収容所に入所したわけではなく、或いは自らの身の保全のために入所したわけでもないからである。すべての収容所は公式に Camp を使用せず、Center となっている。これは当時の政府が強制収容所の存在を隠蔽し、日系人の保全のための仮収容所と定義づけていたからである⁴⁸。つまり官公庁が名付けた Center という表現やアカデミックな場で呼ばれる Center という呼称は、日系人が強制的に収容させられた意味を隠蔽している。よってアカデミックな場において、center (転住所) を意味する言葉よりも、camp (強制収容所 / 監獄) を意味する言葉の方が、より適切に当時の日系人の状況を説明できるのだ。

日系人の収容所入りは1942年3月21日がはじめとされており、場所はロサンゼルス北方のマンザナア (Manzanar War Relocation Center) であった⁴⁹。これを管理し

47 同上

48 WCCA は強制立ち退きと強制収容には何ら関係がないにも関わらず、立ち退きをしなかった日系人にアッセンブリー・センターへの収容を強制し、後にそこから日系人を強制収容所に連行したのである。

49 加藤、前掲書 p.307

たのが、西部防衛司令部の機関として作られた WRA (War Relocation Authority) で、戦時民事管理局である⁵⁰。この組織が中心となって後に以下のすべての収容所を管理することとなった。

強制収容所とその人口

収容所名	州名	開設 (1942)	最高収容人口
トパーズ	ユタ	9月1日	8130
ヒラリバー	アリゾナ	7月20日	13348
ボストン	アリゾナ	5月8日	17814
グラナダ	コロラド	8月27日	7318
ハートマウンテン	ワイオミング	8月12日	10767
ジュローム	アーカンソー	10月6日	8497
マンザナア	カリフォルニア	6月21日	10046
ミネドカ	アイダホ	8月10日	9396
ローワー	アーカンソー	9月18日	8475
ツールレイク	カリフォルニア	5月27日	18789

加藤新一編 (1961) 『米国日系人百年史』新日米新聞社⁵¹

アッセンブリー・センターに収容された日系人は上記の収容所に収容された。本研究ではツールレイクを対象とするので、ツールレイクの収容人員について概観する。ツールレイクは最高収容人口が最も高い。その数は18789人である。開設も二番目に早い、開設された当時は他の収容所と全く同じ目的のために設置された。それは他の施設と同様に日系人を管理するためである。しかし、後にツールレイクは他の収容所と全く異なる人々を管理し投獄するための施設となった⁵²。

日系人が強制収容されるまでの間も、彼／彼女らは日系というだけで排斥されてきた⁵³。真珠湾の事件が生じたとき、日系人は落胆と恐怖とに苛まれた。西海岸に集中

50 同上

51 強制収容所に関する資料の統計は加藤によって詳細に分析されている。この図は加藤の『米国日系人百年移民史』をもとに筆者が加筆した。加藤、前掲書 p.328

52 Ditman, D. 2005. Difficult Choices in Dangerous Times: The Yasui Family in World War II. In Shaw Historical Library, ed. *A Question of Loyalty: Internment at Tule Lake*. Klamath Falls, OG: Journal of the Shaw Historical Library. pp.26-27

53 Tule Lake Committee、前掲書 p.23

していた日系人の人々に対して、FBI は即座に日系人の主要人物をリストアップし逮捕し、尋問したのである。連日、アメリカ社会では出版物と放送によって日系を「敵性人種」として取り上げた⁵⁴。この当時の偏見について、ツールレイクに収容されたヘレン・マツダは次のように述べている。

学校の校長先生は「アメリカ合衆国は日本と戦争をしましたが、このことはアメリカに在住する日系の人々と何ら関係がありませんし、ここにいる日系の人々にはどうすることもできないのです。」といました。しかしながら、私たちの生活するこの社会において、日系と白人に大きな亀裂が生じていたのです。私の白人の友人はパールハーバーの次の日、スクールバスで私の隣に座らなくなったのです⁵⁵。

マツダが述べるように、日系人にとってパールハーバー後の日系社会の状況は最悪であった。日系人＝敵性人種とする言説が至るところで繰り返されたのである。しかしこうした状況は真珠湾の地点で最悪に達したわけであり、それ以前にも数百のアジア系移民を排斥する運動や法律が制定されてきた。ツールレイクに収容されたジミー・ヤマイチは真珠湾の事件直後の土地の売り払いについて、*Second Kinenhi: Reflections on Tule Lake* の中で次のように証言している。

テッド・メイヤーという農作物の買い付けをしていた人とは4年の交流があった。テッドと私の父は取引相手以上のよい友人関係であった。パールハーバーの後の水曜日、テッドが突然私の父に会いにきた。聞けばテッドは彼のボスから火曜日に急いでロサンゼルスに来るように言われていた。そこで彼のボスに「テッド、すぐに日系の人々が所有する農園に行って、状態のいい農園を選び出せ。君がほしいものすべてだ。私達はいい農園をすべて買う。私達はカリフォルニアか

54 同上

55 この証言はヘレン・マツダによるものであり、原文は英語であるため筆者が翻訳した。詳しい原文については Tule Lake Committee、前掲書 p.23を参照されたい。

ら全てのジャップを追い出す」といわれた。テッドははるばるロサンゼルスから私たちの農園に運転してきて「ヤマイチ、君たちみんな、カリフォルニアから追いつられるぞ。」と言った。父は信じなかったが、テッドは「このことは必ずおこる。準備をしておくんだ。」と繰り返した。私たちは運が良かった。立ち退きを言い渡された時にはすでに土地の売買は済んでいた。彼のおかげで相応の値段で売ることができたのだ⁵⁶。

ヤマイチは大変な苦勞をしたが、それでも事前に情報を伝えてくれたテッドのおかげで最悪の状況にはならなかったという。情報を知らなかったほとんどの日系人は土地や家財を売ることもできなかつたり、あるいはその土地を預けても戻ってこなかつたりしたのである。このような状況の中で人々は悉々 WRA の指示に従い収容所へと投獄されることになった。他にも立ち退きに際して多様な状況があつたと推測されるが、全ての日系人は管理され、指定されたアッセンブリー・センターから強制収容所へと連行されたのである。

4. ツールレイク強制収容所



Civil Liberties Public Education Fund ⁵⁷

56 ジミー・ヤマイチはツールレイクコミティーの中心的人物である。彼の活動は戦時中の強制収容体験を後世に伝えることである。この証言の原文は英語であるため筆者が翻訳した。詳しい原文については Tule Lake Committee、前掲書 pp.23-24を参照されたい。

57 Civil Liberties Public Education Fund (CLPEF), *Education Resources: Tule Lake*, <http://www.momomedia.com/CLPEF/index.html>, 閲覧日2016年4月22日

ツールレイク強制収容所はカリフォルニア州モドック地区に建設された。これはオレゴン州クラマスフォールズから約35マイル、ツールレイクの町からは10マイル離れている。この町は英語表記では一語で表記されていて Tulelake となるが、収容所の場合は Tule Lake という二語表記になっている⁵⁸。1942年4月からこのキャンプの建設がはじまり、5月25日に500人の日系人がピュアラップ仮収容所からここに集められ建設を手伝った⁵⁹。当初、このキャンプにおける大半の収容者は、マリスヴィル、パインデール、ポモナ、サクラメント、サリナス等、カリフォルニアを中心とする日系人であった。加えて、サン・ジョアキン・バレーからの収容者は、仮収容所に待機することなく、直接この収容所に監禁された⁶⁰。

当初のツールレイク強制収容所は問題と人々の不満に満ちていた。開所僅か5か月で人々が暴徒化した。理由は不十分な食糧事情であった⁶¹。その後、日常生活を送る上で必要不可欠な資材の不足により、多くのツールレイク被収容者は政府とその管理を行っていた WRA に対して不満を持つようになる。その不満がピークとなったのは、1943年のことであった。この年、WRA が行った全ての日系人に対する忠誠心調査（忠誠か不忠誠か）によって、この収容所は大混乱となった。国家に対する忠誠心の判別によって、収容所内では政府への敵視と管理局に対する不満がピークにまで達したのである⁶²。

1943年2月19日、ツールレイク強制収容所で忠誠登録を強制されたことに反感を持った17～18歳の35名の日系二世が、徴兵局に登録する意思がまったくないことと、

58 Russell, J & Cohn, R. 2012. *Tule Lake War Relocation Center. Scotland*: LENNEX Corp

59 Jacoby, H. S. 1996. *Tule Lake: From Relocation to Segregation*. Crass Valley, CA: Comstock Bonaza Books

60 Burton, J. F. et al. 1999. Confinement and Ethnicity: An Overview of World War II Japanese American Relocation Sites. *Publication in Anthlopology*. 74. Tucson, AZ: Western Archeological and Concentration Center, National Park Service, U.S. Department of the Interior. p.282

61 Kowta, M. 1976. Tule Lake War Relocation Project. In Friedman J, *Archaeological Overview for the Mt. Dome and Timbered Craters Regions, North Central California*, Appendix 1. MS on file, California Historic Resource Information System, Chico, CA: California State University.

62 Burton、前掲書

日本への送還或いは帰国には何時でも署名するといった抗議文を WRA に手渡したのである⁶³。そして彼らは、管理局までデモ行進も行った。彼らの行動はアメリカへの不忠誠を示すものでも、日本への忠誠を示すものでもなかった。収容所に監禁されていることへの憤りと怒りを持って、抵抗した行動であった。しかし、これに対し、管理局側は見せしめとして35名を検挙するため、収容所の近くに駐屯していた約200名にも及ぶ陸軍の一個中隊を派遣することを決めた。そしてデモから2日後の2月21日夜に一斉検挙に踏み切った⁶⁴。これに対してツールレイクでは更に抵抗する者が増えた。

それから二か月間で100人以上が WRA に抗議し逮捕され、Civilian Conservation Corps (通称 CCC) という5マイル程離れた施設に拘束されたのである⁶⁵。このこともあってツールレイク強制収容所では3000名の二世が、忠誠登録の質問27と28を「ノー・ノー」若しくは無回答とした。徴兵に応じたのは僅か59名であった。息子が徴兵に応じた家族は、他の被収容者から邪険に扱われ、食堂内に「イヌの席」と書いた札を立て、その席で食事をするのを強要されたという史料も残っている⁶⁶。

連邦政府の調査によるとツールレイクは他のキャンプと比較しても不忠誠とみなされた割合が最も多かった。例えば他の収容所では不忠誠という刻印を押された人々は全体の10パーセント程であったのに対して、ツールレイクでは42パーセントの人々が答えない、或いは No と答えている⁶⁷。これらの結果から1943年夏、この施設は他の収容所とは異なる名称となり、そして新たに厳重な警備と管理が行われた。実質的にはツールレイク強制収容所は強制収容所から隔離収容所へと施設の名称が変更された。英語では Relocation Center から Segregation Center に変更された。当初、ポストン・キャンプも候補地の一つとして挙がっていた。しかしその数の多さからツールレイクに決定したのであった。

忠誠心調査以前からいたツールレイクの被収容者は、他のキャンプからツールレイ

63 同上

64 渡辺正清(2001)『ヤマト魂 アメリカ・日系二世、自由への戦い』集英社 pp.146-153

65 Burton、前掲書

66 渡辺、前掲書

67 Burton、前掲書

ク強制収容所にくる人々のためにブロックを解放する必要があった。ツールレイク
の元収容者の内、6000人が他のキャンプに移り、8500人が残った。そして8500人の内
4000人がツールレイクに自ら残りたいと WRA に要求し、希望通り残ったのである⁶⁸。

隔離収容所となった後、ツールレイクでは急いで新たなバラックの建設が進められ
た。以下の写真はツールレイク強制収容所に建設されたバラックである。



Tule Lake Concentration Camp, California. Courtesy of the National Archives and Records Administration

このバラック以外に新たな管理施設が建設された。新たな収容者を隔離するために
WRA は多くの人員を動員し、建設に充てさせた。1944年春には、収容者が18000人
となり、WRA が管轄する収容所の中で最大となった。隔離所となったため、警備兵
を増員し、装甲車を8台追加させた⁶⁹。更に、兵士付きのタワーガード、鉄柵が増設
された。これらは農場等の外部と隣接する境界に設置された。このように、ツールレ
イクが隔離収容所となってから、警備の警戒レベルも引き上げられ、彼／彼女らは実
質的に敵性外国人という扱いを超え、犯罪者以上の扱いを受けるようになったのであ
る。しかし、ツールレイクの被収容者は黙って抑圧された収容所生活を受動的に受け
入れているわけではなかった⁷⁰。

1943年10月、被収容者の農業労働者がトラック事故で死亡した⁷¹。犠牲となった労

68 同上

69 Drinnon, R. 1987. *Keeper of Concentration Camps: Dillon S. Myer and American Racism*.
Berkley, CA: University of California Press. p.110

70 同上

71 Burton、前掲書 p.283

働者の妻に対する代償があまりにも少なかったことから、収容所内で働いている日系人が大規模なストライキをおこしたのである。彼／彼女らはただでさえ低賃金で働かされている上に、犠牲者の妻に対する十分な補償がなかったことに異議申し立てをしたのである。これに対し、管理局は他のキャンプから234人の日系人を集め、彼らが働いていた農場で働かせ、管理側によるスト破りを実行させた。スト破りを実行した他のキャンプから来た日系人は、管理側から当時の収容所内の日系人に対して10倍以上の報酬を得ていたという⁷²。

ストライキを行った彼／彼女らの主張を管理側は掻き消した。しかしツールレイクの被収容者はこのような管理側の支配に屈することはなかった。再度管理側による不正行動と不正管理、ストライキを実行する権利を奪われてきたことに対して抵抗した。

管理側はこのストライキに対して、最終的に軍隊を投入し、ジープ、マシンガン、催眠ガスを使用し、彼／彼女らのストライキを封じ込めた。そして疑いのある人々は逮捕されたのである⁷³。ストライキの封じ込めに対して、キャンプ内での不満が増大し、キャンプ内にあるほとんどの仕事を人々はボイコットした。彼／彼女らの抗議に対し、ツールレイクの管轄権がWRAから軍警備へと移行した。これにより更に厳しい管理が為された⁷⁴。WRAから軍警備へと移行されることによって、被収容者の自律性は紛糾された。

軍警備は管理所と収容者との間に、フェンスと5つのタワーを設置した。そして、stockade jail (営倉) を建設させた。ボイコットした人々や、抵抗した人々、逮捕された人々を隔離するため、この営倉に監禁させた。これはツールレイクにおける二重の管理であった。以下は営倉の写真である。

72 同上

73 同上

74 同上



Stockade jail at Tule Lake ⁷⁵



Stockade jail at Tule Lake ⁷⁶

トラック事故から始まった一連の抗議活動によって350人が営倉に監禁された。また1200人も一世が、Department of Justice (司法省) のキャンプに送り込まれた。1944年1月、このままストライキを続ければキャンプ内の食糧事情等にも影響すると残りの被収容者らが考え、投票し、これ以上デモをしないようにキャンプ内の被収容者に指示した⁷⁷。その後、軍部による管理から WRA の管理へと再び移行した。しかし、営倉だけは軍隊が管轄した。抗議活動は、収容所内の不正義を正すための行動であった。この行動によって被収容者らが住みやすい環境に移行するはずであった。

75 同上 p.309

76 同上

77 同上 p.283

しかし1944年5月にふたたびキャンプ内で緊張が走った。5月24日、被収容者の一人が警備員に射殺された。この時期に、収容所管理者は、ツールレイクでのすべての集会を禁止し、学校、職場、スポーツ、リクレーションが閉鎖となった。

更に政府は日系人に対して市民権を放棄できる法律を制定し、日系人に対してその意向を確認した。これは renunciation (市民権の放棄) と呼ばれている。これによって、ツールレイクでは更なる混乱が生じたのである。ツールレイクでは、親日的な団体や、日本に帰国を希望する親も多かった⁷⁸。また家族が別々にならないように、あえてツールレイクに留まった人々も多かった。そのため、この市民権の放棄に関する調査はツールレイクの家族や社会を二分するような混乱を与えたのである。5000人以上の二世がアメリカの市民権を破棄することになった。

これらの理由からツールレイク強制収容所は、閉鎖されたのが最も遅く、1946年3月まで開設された。ヤマイチは Densho のインタビューでこのような状況を以下のよう

(収容所内の)農場でのストライキが、問題の一部でしたね。作物は植えられていたんですが、誰も収穫しない。養豚所も閉鎖された。食糧事情は悪くなる一方でした。それはもうひどくて、ある時なんか、各食堂に、カリフラワーが一箱ずつ届けられただけなんてこともありましたよ。300人用に一箱ですよ。それで花の部分の部分を切って、葉っぱのところは残しておくんですね。葉っぱで何をしようっていうのか？考えたもので、それをきざんで、漬物を作ったんです。もう食べ物

を要求して、大騒ぎになりました。少しずつ何か運ばれてくるんですが、とにかく皆を食べさせるために、何とかしないとイケない。管理側は我々にちゃんとした食事を与えてないんですから、皆怒って、それで奉仕団(即時帰国奉仕団、親日派の団体)の人達がもっと力を持つようになったんですよ。「ほら、あいつらは戦わないだろ？管理側と戦わない。だから、こんな扱いを受けるんだよ。」という

78 Densho、「日系アメリカ人：日系アメリカ人の辿ってきた道を追うオンライン歴史資料館」、http://nikkeiin.densho.org/reference_ch4_04_tule_lake.html、閲覧日2016年4月24日

ふうにな。そこで力をつけていったんです。管理側がますます弱くなる、陸軍はひどい食事を送ってくるので、彼らにしてみれば、もっとたくさんの人をグループに引き入れる武器が揃ったわけです。それをうまく利用しましたね。だから短期間の間に、あれだけたくさんの人を引き入れられたんなんです。それから、管理側が2百、3百人の奉仕団員を捕まえて、4百、5百人にもなりました。皆追い出して、収容所を落ち着けようというわけです。団員達は柵に入れられて、それからピスマルクに送られて、それからニューメキシコのクリスタルシティーでしたね。グループ全体を分裂させて、国内中に散らばしたんです。それで問題解決ってわけです。⁷⁹

ヤマイチは当時の食糧事情がいかに大変であったかを説明している。政府に対する批判が奉仕団への参加を誘導したと指摘している。しかしこうした改善ですら、管理側は受け入れず、逮捕・監禁・移送を行った。ツールレイク強制収容所という監獄の中に更なる監獄を建設していたことは従来の史実においても語られることがなかったのである。

以上のようにツールレイク強制収容所の日系人は忠誠心調査に対してノーと答えて抵抗した。更に忠誠心調査に対して抗議し、支配者側に対する抵抗運動を行った。ツールレイク強制収容所の日系人は WRA のトラック事故に対する不正義を主張したのである。次にツールレイク強制収容所の様子をより詳細に説明するために、収容所内の構造や機能、管理を考察する。

5. ツールレイク強制収容所内の構造・機能・管理

ツールレイク強制収容所が開設されたのは1942年のことであり、周囲に木も水もない枯れた土地に建設された。敷地内では急ピッチで作業が進められた。まず20×100フィートの敷地が計測され、その中に一つのバラックが建設され、中は四つの部屋に仕切られた⁸⁰。今でいう仮設住宅のようなものであるが、そのイメージとはかけ離れ

79 同上

80 Takei & Tachibana、前掲書 p.5

ている。このバラック建設に使用された資材についての詳細が残っている。バラックに使用された資材は建物用としては不十分な素材ばかりであった。これらに使用された資材は乾ききり縮まった木材であった⁸¹。またこれらの資材には無数の裂け目があり、これらの資材を使った壁によって、床や室内の壁、天井に外からのほこりが舞い上がってきたという⁸²。

夏期には熱く乾ききった風が室内に入り込み、寒い時期には冷たい強風が入り込み、更に外壁はタール・ペーパー(防水用)が巻かれていただけであった。つまり断熱材等は全く敷かれていなかったのである⁸³。室内は電球がたった一つだけ用意され、極寒の地で耐えるための石炭ストーブが一つ、簡易ベッド(軍隊用のもの)とブランケットが備品として与えられていたが、それ以外家具は全くなかったという⁸⁴。また棚、椅子、テーブル、キャビネットそして部屋を区切る仕切りも何もなかった⁸⁵。

収容所ではWRAが日系人を効率よく管理するために、彼/彼女らをユニット(グループ)ごとに生活させた。ここでいうユニットとは250~300人が共同で生活するグループのことである。ツールレイク強制収容所に関する調査から、一つのユニットに一つの食堂、洗面所、トイレが与えられていたことがわかった。そして彼/彼女らは一ユニットに提供された共有施設を利用し生活していた⁸⁶。シャワーやトイレを使用する時には列ができ、壁やドアは不足していたためプライバシーは存在していなかった⁸⁷。ツールレイク委員会のメンバーは、ツールレイクの跡地を計測し、当時のトイレ、シャワーの状況を再現した結果、これらの間に仕切りが存在していなかったことが判明した。彼/彼女らにはプライバシーが無かったのである。

バラックは、縦が約6メートル、横が約30メートルで、一つのバラックに4つの部屋があるため、一部屋の大きさは約6×7.5メートルであった。この一部屋に一家族

81 同上

82 同上

83 同上

84 同上

85 同上

86 同上

87 同上 p.6

が住むわけであるが、これは十分な空間ではない。また、資材等を写真から確認すると、こうした施設の素材は安価なものが多く、ツールレイクの気候を考えれば、耐久性の乏しい施設である。居住する施設というよりは小屋である。以下はインタビュー調査において確認した当時のツールレイク強制収容所の模型である。

16のバラックがあり、それぞれ左右8つずつ並んでいる。一つのエリアに64家族が生活していたことになる。



ツールレイク強制収容所とバラック (1) ⁸⁸



ツールレイク強制収容所とバラック (2)

88 筆者のインタビューに協力したインタビューー作成のツールレイク強制収容所模型。

バラックに囲まれている5カ所の建物は、上から女性のトイレ、男性のトイレ、女性のトイレ、ランドリー、その下がアイロニング・ルームである。この写真には記載されていないが、これ以外に食堂とレクリエーション・ビルディングがあった。その大きさは他の資料から推測すると、バラック約一つ分(20×100フィート)であった⁸⁹。

写真の下部にあるのは一つのバラックを4等分した模型図である。6×7.5メートルの空間は一家族が生活するには狭い。レクリエーション・ビルディングでは同一ブロックの人々が教会、学校、集会所として使用することが許可されていた。これらのバラックや共用施設の間には敷石など何もなく、雪解けや雨の日には水浸しになっていた⁹⁰。共用施設での混雑は避けられなかったし、シャワーやトイレ、洗面所は人が溢れ、壁とドアが不足しており、隣同士の様子がそのまま見えた⁹¹。64家族が一つのエリアでトイレ、食事、洗面を共用していたのである。一方、キャンプ内の監視員の室内にはこれらの施設が全て備わっていたという⁹²。被収容者は気候に関わらず歩いて外の共用施設まで行かなければならなかった⁹³。

以下はヤマイチが再現したバラック内部である。



Japanese American Museum of San Jose ⁹⁴

89 Burton、前掲書

90 Takei & Tachibana、前掲書 p.6

91 同上

92 同上

93 同上

94 当時の施設を再現したものがJapanese American Museum of San Joseにある。この施設はツールレイクの被収容者ジミー・ヤマイチが再現した施設である。

建物自体は木を貼り合わせただけの構造で、バラック内部は至るところに隙間風が吹いた。ツールレイクの気候は寒暖の差が激しく、定期的に砂埃が舞うため、室内で洗濯物を干したり、仕切りを作るために部屋の上部に何本もの紐が張られていた。ベッドは大変固く、板の上に薄いシーツが被せられているような簡易ベッドであった。一部屋に一つだけ明かりと暖炉が配備されていた。このレプリカには廃材のようなもので作成した棚や絵等が飾られていた。過酷な状況の中で少しでも家族の空間、或いは自分の空間を豊かにするための苦労を垣間見ることができた。



Japanese American Museum of San Jose ⁹⁵

上の写真は兵役を拒否した人々である。ヤマイチを中心として運営されるサンノゼの博物館では、このようにアメリカに対して忠誠を示さなかった人々の資料を保存し、後世に伝えている。彼／彼女らの全てがツールレイク強制収容所に収容されたわけではないが、ツールレイク強制収容所での異議申し立ては、ナショナルな枠組みに一致しない人々、国家に回収されない人々の生の活動として理解できるのである。

おわりに

本研究では日系人の歩みを概観しながら、1942年に開設された日系人の強制収容所に注目した。特に、同年設置されたツールレイク強制収容所の史実を調査し、忠誠心調査にノーと答えた人々や収容所内の出来事を明らかにした。本研究から、ツールレ

95 Japanese American Museum of San Jose, Draft Resistance

イク強制収容所では日系人が厳しく管理され、食糧も十分に与えられず、支配／被支配の構造の中で抑圧されてきたことが明らかとなった。

現在のアメリカ社会、特に日系コミュニティにおいて、ツールレイク強制収容所の被収容者であった者は「ツურიანზ (Tuleans)」と呼ばれ、蔑視されてきた。しかし本研究において彼／彼女らは、国家による管理や支配に対して異議申し立てをしてきたことが理解できた。彼／彼女らは国家への忠誠を拒んだという単純な理解ではなく、強制的に収容されたことへの怒りと葛藤の中で、活動し続けたのである。

従来、日系人は、アメリカに忠誠を示し、アメリカ社会に貢献し、善良な市民として表象されてきた。しかし、本研究からは、忠誠心調査や日系人への管理や排斥に対して異議を申し立ててきた日系人の姿を解明することができた。日系人に対する差別や排他的な法律、更には強制収容という不条理な社会の中で、日系人が葛藤しながらアメリカ社会を生き抜いてきたことが本研究により明らかとなった。

参考文献

- Arakaki, Robert K. 2002. Theorizing on the Okinawan Diaspora. In *Okinawan Diaspora*, ed. Ronald Nakasone. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Burton, J. F. et al. 1999. Confinement and Ethnicity: An Overview of World War II Japanese American Relocation Sites. *Publication in Anthropology*. 74. Tucson, AZ: Western Archeological and Concentration Center, National Park Service, U.S. Department of the Interior.
- Ditman, D. 2005. Difficult Choices in Dangerous Times: The Yasui Family in World War II. In Shaw Historical Library, ed. *A Question of Loyalty: Internment at Tule Lake*. Oregon Institute of Technology, Klamath Falls, OG: Journal of the Shaw Historical Library. pp.26-27.
- Drinnon, R. 1987. *Keeper of Concentration Camps: Dillon S. Myer and American Racism*. Berkley: University of California Press.
- Fukuyama, F. 1992. *The End of History and the Last Man*. NY: Free Press.
- Fukuyama, F. 2011. *The Origins of Political Order: From Prehuman Times to the French Revolution*. NY: Farrar, Straus and Giroux.
- Honda, T. 2013. A Critical Analysis of Multiculturalism from Japanese American Studies. *Afrasia Working Paper Series*, Afrasian Research Centre, Ryukoku University. No.16.
- Jacoby, H. S. 1996. *Tule Lake: From Relocation to Segregation*. Crass Valley, CA: Comstock Bonaza Books.

- Karatani, R. 2012. Unravelling Security and Insecurity of Female Overseas Domestic Workers: 'Global Householding' and 'Global De-Householding' Examined. *Afrasia Working Paper Series*, Afrasian Research Centre, Ryukoku University. No. 2.
- Kowta, M. 1976. Tule Lake War Relocation Project. In Friedman J, *Archaeological Overview for the Mt. Dome and Timbered Craters Regions, North Central California*, Appendix 1. MS on file, California Historic Resource Information System, Chico, CA: California State University.
- Russell, J & Cohn, R. 2012. *Tule Lake War Relocation Center*. Scotland: LENNEX Corp
- Shimizu, K. 2013. Re-thinking of the Intellectual History of Pre-War Japan: An Application of Arendt's and Carr's Theories of the 'Twenty Years' Crisis to a Non-Western Discourse. *Afrasia Working Paper Series*, Afrasian Research Centre, Ryukoku University. No. 22.
- Takaki, Ronald T. 1993. *A Different Mirror: A History of Multicultural America*. Boston: Little Brown and Company.
- Takei, B. & Tachibana, J. 2012. *Tule Lake Revisited: A Brief History and Guide to the Tule Lake Concentration Camp Site*. San Francisco: Tule Lake Committee.
- Funke, T. 2008. *The No-No Boys*. Fort Collins, CO: Victory House Press.
- Tule Lake Committee. 2000. *Second Kinenhi: Reflections on Tule Lake*. San Francisco: Tule Lake Committee.

- アバデュライ, アルジュン (2010) 『グローバリゼーションと暴力—マイノリティーの恐怖』藤原達郎訳 世界思想社.
- 伊藤一男 (1969) 『北米百年桜』北米百年桜実行委員会.
- 外務省領事移住部『わが国民の海外発展—移住百年の歩み』(カリフォルニア大学バークレー校図書館より現在相愛大学図書館収蔵資料).
- 加藤新一編 (1961) 『米国日系人百年史』新日米新聞社.
- グラムシ, アントニオ (1999) 『知識人と権力—歴史的・地政学的考察』上村忠男編訳 みすず書房.
- クリフォード, ジェイムズ (1998) 「ディアスポラ」有本健訳『現代思想』26 (7) 120-156.
- コーエン, ロビン (2001) 『グローバル・ディアスポラ』駒井洋・角谷多佳子訳 明石書店.
- 今野敏彦・藤崎康夫 (1986) 『移民史Ⅲ』新泉社.
- 坂口満宏 (2001) 『日本人アメリカ移民史』不二出版.
- 清水耕介 (2006) 『グローバル権力とホモソーシャル・暴力と文化の国際政治経済学』御茶の水書房.
- 戴エイカ (1999) 『多文化主義とディアスポラ』明石書店.
- 戴エイカ (2001) 『批判的ディアスポラ論とマイノリティ』明石書店.
- タカキ, ロナルド (2004) 『ダブル・ヴィクトリー—第二次世界大戦は、誰のための戦いだったのか』大和弘毅訳 白艸舎.
- 田中道代 (2001) 『アメリカの中のアジア』社会評論社.
- 丹波清隆 (2007) 「記録の技法 (トランスクリプション)」御厨貴編『オーラル・ヒストリー入

門』岩波書店.

フクヤマ, フランシス (1992) 『歴史の終わり(上)』渡部昇一訳 三笠書房.

ヘーゲル (1994) 『歴史哲学講義(上)』長谷川宏訳 岩波文庫.

ベフ, ハルミ (2001) 『日系アメリカ人の歩みと現在』人文書院.

ホール, スチュアート (1998) 「文化的アイデンティティとディアスポラ」小笠原博毅訳『現代思想』26 (4) 90-103.

本多善 (2012) 「移民の異文化交流と仏教の可能性—異質性を克服するための縁起思想を中心に—」『京都・宗教論叢』6号.

武者小路公秀監修、浜邦彦・早尾貴紀編『ディアスポラと社会変容—アジア系・アフリカ系移住者と多文化共生の課題』国際書院.

森茂岳雄 (1999) 「アメリカの歴史教育における国民統合と多文化主義」油井大三郎・遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ—揺らぐナショナル・アイデンティティー』東京大学出版会.

渡辺正清 (2001) 『ヤマト魂 アメリカ・日系二世、自由への戦い』集英社.

Civil Liberties Public Education Fund (CLPEF), *Education Resources: Tule Lake*,

<http://www.momomedia.com/CLPEF/index.html>, 閲覧日2016年4月22日.

Densho, 「日系アメリカ人: 日系アメリカ人の辿ってきた道を追うオンライン歴史資料館」,

http://nikkeijin.densho.org/reference_ch4_04_tule_lake.html, 閲覧日2016年4月24日.